

魔法の言葉プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 近藤創 所属：香川県立高松養護学校 記録日：平成30年2月6日

【対象者の情報】

年齢：44歳

障害名 脳性まひ

肢体不自由 構音障がい

【活動進捗】

・活動の当初の目標

①勉強会（大学で週一回行われる勉強会、参加者は保育所や幼稚園、学校の教師、大学生、施設関係者、など約30名）で、自分の考えや知識を多数の相手に正確に、スムーズに伝える方法を検討する。

②会話でしゃべっても伝わらなかった時、対象者にとって「スムーズにかつ楽に伝える方法」があるのか試してみる。

・活動を実施した期間：平成29年5月から実施

・活動の実施者：近藤創

・実施者と対象児との関係：卒業生、友人

【対象者の事前の状況】

○構音障害があり、発音がやや不明瞭である。呼吸や唾を飲み込むことがやや時間がかかることもあり、言い終わるまでの時間がやや長くなる。

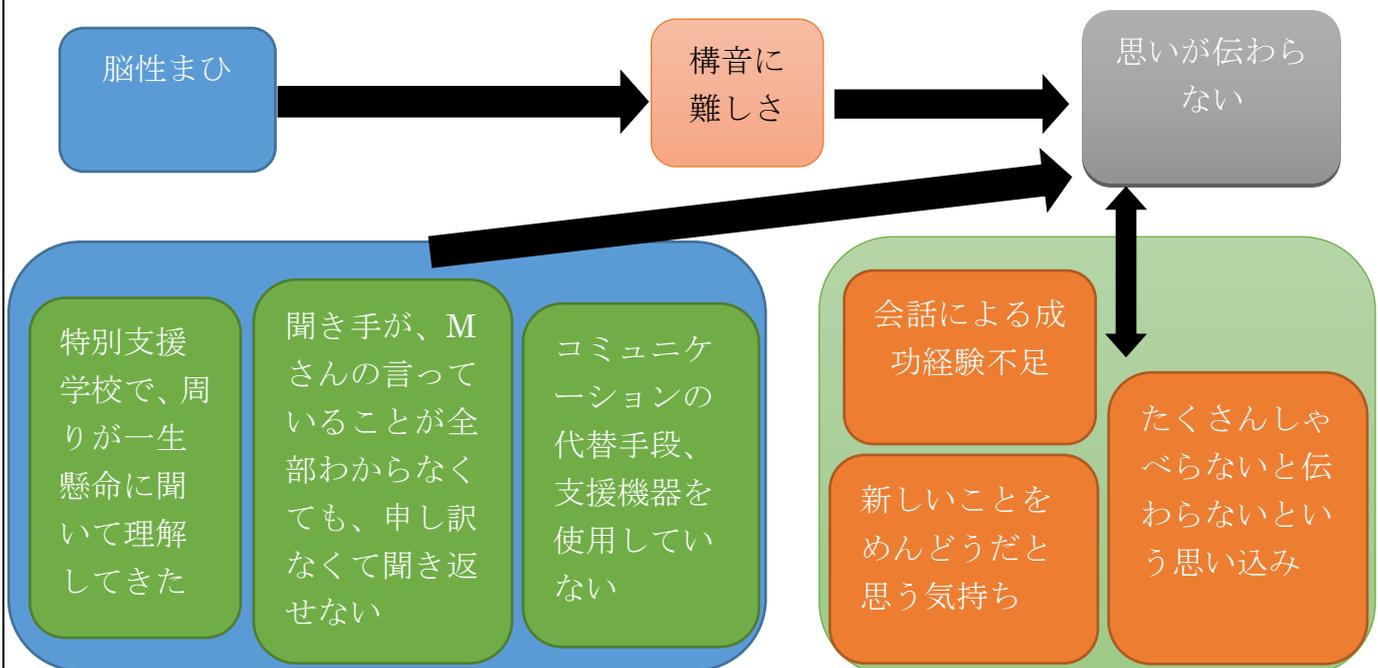
○「パソコンや、電子機器を障害者が使うためには支援技術を使う必要があるとおもいます。」という言葉をししゃべるのに費やす時間を計測した結果、報告者の場合は10秒だが、20秒かかった。

○話をするとき、必要以上に謙遜をしたり、たとえ話をしたりすることで本来の部分以外の文が長くなり時間がさらに長くなる。

○慣れた人が時間を掛けて聞き返しながら会話をするので大体のことは伝わる。

○支援技術は使っていない現状がある。

・伝わらない背景についての報告者の考察



【活動の具体的な内容と対象者の変化】

○使用したアプリ等 ・WindowsPC ・Microsoft Office ・PowerPoint

(1) Mさん自身が勉強会での自分の発表について「どう思っているのか、どう感じているのか」を聞き取り、意見を交わしながら共通理解をする。

①方法：Mさんと週一回、2から3時間食事をとともにしながら聞き取りや展開を共に考えた。

②結果：回数を重ねるうちに、Mさんと実践者の関係も深まり、色々な気持ちを打ち明けてくれるようになった。



・しゃべるのが下手な僕も悪いんだけど、あきらめしないで、がんばって聞いてほしい
・ひとりだけ機器を使うのはカッコ悪いし
・近藤君は構音障害のあるひととの会話に慣れていないんだよ

・少しでも、楽な状態でがんばらなくても会話ができたらいいですねえ。

・僕は支援機器を使うことがカッコ悪いとは思わないのですが、Mさんがそうお思いなら、他の人にも聞いてみませんか？

(近藤の感想：カッコ悪いという言葉の中には、「しゃべりで通じるのにめんどくさい」とか「わざわざ使うのはめんどくさい」とか「人と違うのは嫌」だとかの気持ちがあるんじゃないかな?)

・勉強会って慣れている人少ないですよ？慣れている人にしか伝わらないより、いろんな人に伝わりやすい方が得じゃないですか？その方法考えませんか？



○話し合う中で、Mさんの思いがわかり、報告者との間に意識のずれがあることに気付いた。そして、報告者以外の他者との間にも、同様のずれ違いが存在し、それに気付けない状態があるのではという仮説が立った。Mさんのもつ考え方や、自身の経験談は、報告者の感想として、とても貴重なものなので、それが発表の方法により、他の参加者との間で共有できない現状があることはもったいないと考えた。

本人が意識のずれについて聞いてみたいという強い希望を持ったので、アンケートの活用を提案した。内容は、Mさんが聞いてみたい、確認してみたい内容を選択した。

(2) 対象者と共に学習会に参加する友人らの気持ちをアンケートで形にし、Mさんのコミュニケーションに対する不安を取り除き、ポジティブに自信をもって活動に取り組めるようにする。

①方法 (アンケートについて)

- ・対象は勉強会の参加者 20代の学生から50代の社会人まで
- ・Mさんとの交際歴は3か月から約10年まで
- ・アンケート内容はMさんと近藤で作成
- ・同内容をMさんも実施し比較する

○アンケートの項目例

- ・支援機器を使うと人と違ってカッコ悪い
- ・Mさんは話が通じないとき、Mさんから伝えることをあきらめることがある
- ・Mさんの話が長いと感じている
- ・聞きたいことがあっても、躊躇することがある

等 全23項目

②結果（アンケートをとってみて）

- ・Mさんの話を理解したい、その内容をすごく知りたいというポジティブな数値が高かった。
- ・支援機器を使うということがカッコ悪いと感じている人はいなかった。

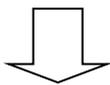
<アンケートをとった後のMさんとの会話の中で>



- ・みんな気持ちをはっきり教えてくれなかったので、聞き返すことを申し訳ないと感じている人が多いとは思わなかった。
- ・自分の話を楽しみにしてくれているのがわかってうれしかった。
- ・自分だけ機器を使うのは恥ずかしいと思っていたけど、周りの人はそう思っていなかったことがわかったのはびっくりした。

○周囲の人が話を聞きたいと思っていること、そのためにわかりやすく言ってほしいと望んでいることなど、ポジティブに内容を受けとめる姿が見られた。

○支援機器についてのネガティブなイメージを他の人がもっていないことは本人にとって発見だったそうである。



○Mさんの発言がしっかり伝わることを目標に支援機器を利用してみることに

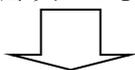
(3) Mさんが望む姿にどうやったら近づくことができるか考える。

○どんなことを望むか？

「勉強会で、自分の意見を周りの人がスムーズに理解できるようにする」

○そのための方法

勉強会での発表を初めて会う人でもわかりやすく、準備しやすい方法を探る。



○Mさんが持っている技術 PC スキル、持っている機材 WindowsPC を利用して発表する
(具体的にはパワーポイントを利用して発表することにした。)

(4) 実際に取り組む

①実施方法

- ・勉強会にパソコンを持ち込み、パワーポイントを利用して考えをまとめ、プロジェクターで画面を提示しながら発表をする。
- ・学習会参加者には、Mさん本人から発表スタイルについての説明をし、了解をしてもらってから取り組んだ。

昔からCAIの考え方はありましたが、パソコンを教えてくれる先生が少なく週一時間しか授業がなく。

知り合いが運営しているパソコン塾へ通った。(坂出へ)

スライドの一例



②実施した結果

<よかった点>

- ・言いたいことが確実に伝わった。
- ・聞いている人たちのリアクションが目に見えて変わった。うなずいたり、後で感想を言ってくれたり、聞きに来てくれたりすることが増えた。
- ・話の途中で言いたいことがわからなくなるのがなくなった。

<問題になった点>

- ・準備に手間がかかる
- ・原稿を用意するとき丁寧にたくさん書こうとするあまり時間がかかる。

③事後の変化

○対象者の感想

- ・みんなの反応がすごくよくなってうれしい。
- ・パワーポイントを使うのは全然恥ずかしくなかった、これからも使いたい。
- ・もう少しパパッとできたらいいね。
- ・僕はしゃべるのが苦手だから、たくさんしゃべる必要があると思ってたけど、短い言葉の方が伝わりやすいんだねえ

○勉強会参加者の感想

- ・とてもわかりやすかったです、Mさんの経験談は興味深かったです。
- ・今までしゃべりがわからないときは聞くのが申し訳なかったけど、内容がわからないようになったので質問ができました。

(4) もっともっと伝わるように

- ・勉強会参加者の感想や、伝わりやすさについての分析を報告者とするうちに、「しゃべることをコンパクトにすると伝わりやすい」ということに気付くことができた。
- ・回数を重ねるうちに紙に書くよりもきれいに整理でき、パワーポイントより手軽な Word を使って要約し、パワーポイントを使わずに短いセンテンスで発表することで伝わるというスタイルを確立させた。
- ・発表とは別に、報告者とMさんとの間で一対一でしゃべっていて、伝わらない言葉があったら携帯電話のメモで単語のみを記入し、補う形式を試している。報告者にとってこの方法はとてもわかりやすく、Mさんの感想としても負担が少ないため、支援機器の可能性の一つとして考えていきたいと話している。

パソコンを使って、しゃべることの要点を整理して、パワーポイントを使わず、短い言葉で発表するというスタイルを確立させた。



メモを取りながら要約



メモを取りながら要約

学習会の発表以外でも、要点をまとめ、短い言葉で話すことにより、伝わりやすくなった。また、伝わらないときは携帯電話に言葉を入力し伝えることで、あきらめなくてもよくなった。



携帯電話のメモ機能を使用して、あきらめずに伝えることができる。

【報告者とMさんの気づき】

・Mさんは自身のことを当初「僕はしゃべるのが下手だから、たくさんしゃべって補わなくちゃ伝わらない」と考えておられたそうである。実践後、以前を振り返って、Mさんは「短い言葉でテンポよく話す話が弾んだよ。今まではしゃべることに夢中になって一方的にしゃべってたのかもしれないな」と自身のことを語ってくれた。活動の当初の目標である、『自分の考えや知識を多数の相手に正確に、スムーズに伝える方法を検討する。』『会話でしゃべっても伝わらなかった時、対象者にとって「スムーズにかつ楽に伝える方法」があるのか試してみる。』に関して、Mさんや勉強会参加者の実践後の感想から達成できたと感じている。

・達成について報告者なりに考えてみると、言葉を補うために、パワーポイントというツールを使うことで解決するという当初の想定の方があった。しゃべったことが伝わるという手ごたえはMさんの心理的な変化をもたらし、Mさん自身が伝わりやすさについて自ら考え、要点をまとめて会話をするという会話の技術を意識できるようになった。相手の立場になって相手が聞き取りやすい会話について意識できるようになったことはMさんにとってとても良い発見だったそうである。

【今後の見通し】

○スピード、利用機器の改善

＜発表のツールから、しゃべりの小さな困難を補う技術に＞

・正確に伝わることを経験し、伝わる楽しさ、気持ちよさを経験することができた。また、機器を使うことへの抵抗も薄れてきた。それをもっとシンプルに日常でも使える形にできると、今まで無意識生まれていた遠慮やあきらめがなくなり、普段接しない人と会話を楽しむ上での垣根が小さなものになるのではという仮説が立てられた。

・発表時は簡単なことに関しては自分で内容をパソコンを使って要約した後、短いセンテンスで伝える。長い話をする際のツールとしては、引き続きパワーポイントを使用していく。次のステップとして、パワーポイントの欠点である時間がかかったり、手間がかかったりする部分をMさん主体で使いやすい、使いたい方法について、試行錯誤しながら探していく。

【最後に】

今回の実践では、対象者と綿密に打ち合わせし、時間を共にすることがとても有効であることが再確認された。本人と周囲の考えの違い、構音障害に対して、周囲から好意的な気持ちを伴った遠慮、またそれによる人間関係を築く上での損失など、話が通じにくいということから発生する様々な問題にしっかりと向き合うことができたからである。周りが配慮、努力して苦手なことを助けることはその場面においては良いことだが、対象者の長い人生にとっては良いことばかりではないのかもしれないと改めて考えさせられた。

本人の思いに寄り添いながら、ありがたい姿に共に考えながら進む経験はとても貴重なものとなった。今後も友人として、お互い成長していける間柄でいたいと考える。